

紫波町史編纂委員会編

紫波町史

第二卷

紫波町発行



新山展望台から紫波町を望む

空と野
穂英の村や
地の子
行方不明者

紫波町名誉町民

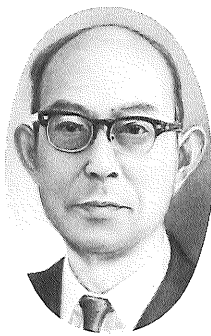


野の
村むら
胡こ
堂どう

捕物小説としては本邦随一といわれる「銭形平次捕物帖」や「池田大助捕物帖」の作家として有名な野村胡堂（本名長一）氏は、明治15年10月15日、町内大巻で生まれた。作家としてのほかに音楽評論家「あらえびす」の名でも有名。

昭和33年菊池寛賞受賞、34年12月22日名誉町民に推挙、35年には紫授褒章を受けた。また、野村学芸財団の設立、町に胡堂文庫を寄贈するなど町内外の文化興隆にも寄与している。

昭和38年4月、80歳で死去。同年従四位勲三等に叙せられた。

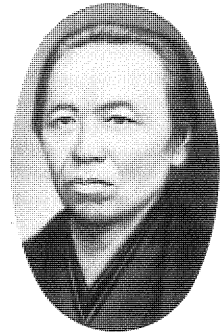


村むら
谷たに
永えい
一郎いちろう

村谷永一郎氏は、紫波町誕生と同時に初代町長に就任し、亡くなる昭和44年12月まで4期14年8カ月間にわたって町政を担った。町内上平沢出身。

昭和30年5月5日の初代町長選に当選、1町8カ村が合併した後の困難な問題に取り組み、現在の紫波町の礎となる農林業の振興、教育の振興、道路網の整備などに心を傾け、住民の福祉向上をはかった。

昭和44年12月、60歳で死去。45年1月10日、従六位勲五等瑞宝章に叙せられ、同年3月17日に名誉町民に推挙された。

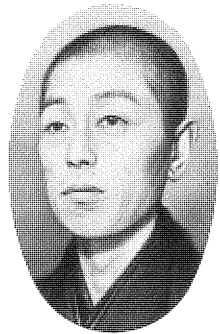


すかわちよの すけ
須川長之助

「チヨウノスケソウ」の発見で有名な植物収集家須川長之助氏は、町内下松本出身。

天保13年に出生。函館へ出稼ぎに行っているとき、植物学者として世界的に有名なロシアのマキシモウィッチ博士と知り合い、博士の依頼で日本全国を踏査した。博士の名付けた380種の植物の学名のほとんどは、長之助の収集したものとかわれている。後年、長之助の功に報いて12種類の植物に彼の名をとって命名された。

大正14年、84歳で死去。昭和53年3月9日、名誉町民に推挙された。



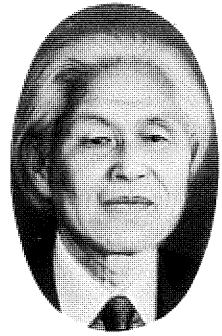
はしもと ぜんた
橋本善太

昭和初期、畜産界では「鶏卵オリンピック」が行われていた。これは、毎日確実に産卵する鶏を育てようというもの。

明治25年、町内日詰に生まれた橋本善太氏は、世界に先がけてこの偉業を達成、ときに昭和14年であった。

この鶏は、当時の岩手県知事国分謙吉氏から、彼の名前にちなんで「ゼンタークス」と命名された。

昭和31年、60歳で死去。従六位勲六等瑞宝章に叙せられる。53年3月9日、名誉町民に推挙された。



巽^{たつみ}
聖^{せい}
歌^か

児童文学者であり、歌人の巽聖歌（本名野村七蔵）氏は、明治38年、町内日詰に出生。雑誌「赤い鳥」に投稿しているうちに北原白秋に認められ、彼の門下に入り、白秋高弟の一人に数えられた。

そして、「水口」「野ぜり」「子きぎす」など多数の児童文学を発表するかたわら、短歌、少年詩の道を歩み、児童文化賞や毎日出版文化賞などを受賞。ほかに、町内小中学校の校歌も作詞している。

昭和48年4月、69歳で死去。53年3月9日、名誉町民に推挙された。



発刊のことば

「わたくしたちの紫波町は、北上川のゆたかな流れに恵まれた自然の風土と、先人のたゆまぬ努力によって発展してきました。」

この一文は、昭和五十年四月一日をもって制定した『紫波町民憲章』の前文の一節であります。

紫波町は、このように有史以来から、北上川のゆたかな流れと肥沃な土壌どじょうに恵まれ、さらに先人の不断の努力が重ねられ、発展してきたところであります。

従って、これらの古い時代から開発された歴史を証拠づける、幾多の資料や遺跡が各地域に包蔵されておりますが、貴重なこれらのものが、時代の流れとともに、次第に散逸さんいつし埋没する傾向が著しくなってきました。そこで、紫波町の歴史と先人の遺産を明確にし、これを永く後世に伝えるため、昭和三十五年紫波町史編さん事業を計画し、これに積極的に取り組んでまいりました。そして昭和四十七年三月には、有史から近世までを記述した第一巻を刊行、さらにその後雌伏十有余年にして、今また、近代・現代を内容とした第二巻の発刊をみることができました。

今さら申し上げるまでもなく、私たちの紫波町は岩手県の中央部に位置しているとはいえ、悠久な歴史の上では、奥羽の辺境史として、国史の一端を彩っているにすぎないところであります。しかしながら、先人の血のにじむ努力と英知によって開発発展がなされてきた事実面に直面したとき、まさに私たちは、時代を超えて共感をおぼ

え、今後の町勢発展に資するものがあると確信するものであります。そして本書の精読を契機に、先人の血を現代に蘇^{よみがえ}らせ、今後にむかってさらに隆盛発展のあらんことを心から念願している次第であります。

終りにあたって、第一巻の執筆を担当し、本書の執筆半ばでご他界された故佐藤正雄氏のご冥福をお祈りいたすとともに、その後、分担して執筆校正下さいました編さん委員各位のご尽力と、最新の技術で速やかに印刷製本にあたられた株式会社熊谷印刷のご努力に対し、深甚なる感謝を申し上げ第二巻発刊のごあいさつといたします。

紫波町長 福田 嘉一郎



編さん刊行にあたって

紫波町史第二巻を皆様にお届けすることとなりました。

第一巻刊行から十か年余の歳月を費やし、発行のおくれたことをお詫び致します。これは第一巻刊行に引続き、佐藤正雄先生を中心に鋭意努力を傾けて編集に当たったのですが、執筆担当の佐藤先生のご病気ご他界をはじめ、委員及び協力の方がたの物故に逢い、一時途方に暮れた次第でしたが、委員一同仕事を分担してこれに当ることとし、新たに工藤隼人先生を委員に迎え、原稿の整理と執筆に尽力を仰ぎ、ようやく第二巻刊行にこぎつけたわけであり、まずことをご理解いただきたいと存じます。

第一巻は古代から近世までの記述ですが、第二巻は近代・現代であり、項目によっては昭和五十四、五年頃まで記したところもあります。したがって資料も比較的容易に入手出来たと考えられがちですが、決してそうではなく地誌的なものゆえ、かえって散逸滅失さんいつめつしつも多く、委員の方がたの苦心は大変であったと思います。しかし町内の資料を完全に利用出来たわけではなく、今後発見されるものもあると存じますが、これは後顧にゆずることにします。

また分担執筆のため、文体文脈の一貫性が薄れ、あるいは新旧かなづかいなど校正の届かなかった点もあると思えますが、お許し願います。

最後に委員各位は勿論、ご協力下された方がたに厚くお礼を申し上げますと同時に、終始編集事務の推進に取り組

んで下された教育委員会職員各位の労を多とし衷心から謝意を表して、発刊のごあいさつといたします。

紫波町史編さん委員会

委員長

瀬

川

岩

雄

凡 例

- 一、本史の掲載年代は、明治維新（一八六七年）以降の近代・現代編とした。
- 二、記述の構成については、八つの部門を設定してそれぞれの部門ごとに、年代を追って各論的に展開する方式を採用した。
- 三、特殊な用語や常用漢字以外の漢字には、つとめてふりがなを付したが、二度目以降においては省略をしたものも多い。
- 四、年代表示は日本年号により、その下に（ ）を付して西暦紀元年号を併記することにした。
- 五、引用した書名は文中では『』で、文は「」で、くくって表示した。
- 六、度量衡の単位は、その時代の慣行を本位としながらも、一部はメートル法に換算して表記した。
- 七、本史の執筆は、故佐藤正雄を含む町史編さん委員全員が分割して担当した。

紫波町史目次

第五編 近代・現代

第一章 地方自治……………三

第一節 地方自治の確立期……………三

- 第一 明治変動期の町村行政……………五
- 一、管轄県の変遷 二、中間行政機構の変遷
- 三、末端行政機構の変遷

第二章 自治構造……………六五

第一節 旧村時代……………六六

- 第一 町村行政の展開……………六六
- 一、戸籍の整備 二、土地制度の改革
- 三、税制の改正 四、町村財政の実態

第二節 一町八か村時代……………一一一

- 第一 自治機構の変遷……………一一二
- 一、町村制の施行 二、郡制の施行

三、旧制町村自治の展開

四、現行地方自治制の形成と発展

第二 財政の推移……………一四八

一、町村財政制度の変遷 二、財政構造の推移

第三 行政展開の実例……………一六七

第四 町村合併の促進……………一八二

一、町村合併促進法の制定

二、県段階における促進措置

三、一町八か村の合併促進

第三章 紫波町時代（創始期）……………二二五

第一 紫波町の発足……………二二五

第二 自治機構の変遷……………二二七

一、議会 二、町長と補助機関 三、教育委員会

第三章 社会構造の変遷……………二六三

第一節 農地の変遷……………二六三

第一 太平洋戦争終戦までの土地制度……………二六三

一、明治以前の土地制度 二、明治期の土地制度

三、明治期の小作料	四、明治期の農業政策	三六九
五、激動期の土地制度	六、地主階層の状況	三七一
七、農地改革への動き		
八、終戦前の自作農創設維持と農地調整法の施行	九、小作料統制令、臨時農地価格統制令、臨時農地等管理令	三七五
第二節 治安		三四三
第一 警察		三四三
一、藩政時代の治安	二、明治期の警察	三四三
三、大正期の警察	四、昭和期の警察	三四三
第三節 消防		三九〇
第一 交通安全		三六九
一、交通安全協会	二、交通安全母の会	三七一
第三 防犯協会		三七一
一、日詰地区防犯協会の活動		三七一
第二 医療機関		三九〇
第一 開業医		三九三
一、明治・大正期の医師		三九三
二、昭和期の医師		三九三
第三 直営診療所		三九九
第四 病院		四〇五
一、私立病院の開設		四〇五
二、紫波地域における公的病院		四〇五
第四章 産業経済		四一三
第一節 団体		四一三
第一 農業協同組合		四一五
第二節 厚生		三九〇
第一 医療機関		三九〇
第二 開業医		三九三
一、明治・大正期の医師		三九三
二、昭和期の医師		三九三
第三 直営診療所		三九九
第四 病院		四〇五
一、私立病院の開設		四〇五
二、紫波地域における公的病院		四〇五
第五 農地改革後の農地の動き		三三三
一、田の動き	二、畑の動き	三三三
第六 農業委員会の発足		三三七
第四 農地の買収と売渡		三三三
一、農地その他の買収	二、売渡	三三三
三、農地改革指定村	四、農地解放地主連盟	三三三
第五 第二次農地改革		三〇九
一、第二次農地改革の発足		三〇九
二、第一次農地改革との相違		三〇九
第四 農地の買収と売渡		三三三
一、農地その他の買収	二、売渡	三三三
三、農地改革指定村	四、農地解放地主連盟	三三三
第五 農地改革後の農地の動き		三三三
一、田の動き	二、畑の動き	三三三
第六 農業委員会の発足		三三七
第二節 治安		三四三
第一 警察		三四三
一、藩政時代の治安	二、明治期の警察	三四三
三、大正期の警察	四、昭和期の警察	三四三
第三節 消防		三九〇
第一 交通安全		三六九
一、交通安全協会	二、交通安全母の会	三七一
第三 防犯協会		三七一
一、日詰地区防犯協会の活動		三七一
第二 医療機関		三九〇
第一 開業医		三九三
一、明治・大正期の医師		三九三
二、昭和期の医師		三九三
第三 直営診療所		三九九
第四 病院		四〇五
一、私立病院の開設		四〇五
二、紫波地域における公的病院		四〇五
第四章 産業経済		四一三
第一節 団体		四一三
第一 農業協同組合		四一五

一、農会の誕生 二、農会の活動 三、産業組合	
四、農業恐慌と戦時統制経済の時代	
五、農業会	
六、農業協同組合の設立と再建整備	
七、農協合併 八事業の概況	
第二 農業共済団体	四五六
一、家畜保険制度 二、農業保険法の時代	
三、農業災害補償制度	
第三 土地改良団体	四七〇
一、山王海土地改良区	
二、紫波東部土地改良区	
三、鹿妻穴堰土地改良区	
第四 森林組合	四九〇
一、志和村森林保護組合	
二、紫波郡東部地域の概要	
三、紫波郡西部地域の概要	
四、森林組合広域合併	
第二節 農業	五一二
第一 稲作	五一四
一、育苗と田植 二、農業災害	
三、農業経営と農家生活の変遷	
第二 畜産	五五八
一、馬 二、牛 三、鶏 四、中小家畜	
第三 養蚕	五七六
第三節 商工業	五七九
第一 明治以降の変遷	五七九
一、市日 二、小売業	
三、市街地と宿駅の等級	
四、紫波郡勸業会の設立と県勸業博覧会への出品	
五、日詰商業組合の設置 六、商業会社の出現	
七、明治後期の日詰町の商工業	
八、工場の登録 九、昭和戦中時代	
十、紫波町合併以後	
第二 商工会等の設立	六〇七
一、紫波町商工会 二、日詰商店会	
三、志和サーブス店会	
四、協同組合「紫波優良店会」	
第三 誘致企業	六一三
第四節 林業	六一五
第一 地域の山林概況	六一五
一、自然条件 二、明治以降の林野行政基調	
第二 造林	六二二
一、造林補助申請	

二、公有林林野造林事業奨励	
三、特用樹の造林	四、学校林
五、造林面積の推移	
第三 用材	六三〇
第四 木炭	六三三
第五 薪	六三七
第六 林野整備	六三九
一、公有林野の整備	
二、官有林(入会山)の林野整備	
三、林野整備の実例	
第五節 水産業	六五三
第一 鮭漁	六五四
第二 養鯉業	六五八
第六節 鉱業	六六二
第七節 醸造業	六七一
第一 営業酒造	六七一
第二 自家酒造	六七五
第三 南部杜氏	六七八
第四 麴製造業	六八二
第五 味噌・醤油醸造	六八七
第六 練乳工場	六九一

第八節 金融	六九九
第一 銀行	六九九
一、第一国立銀行の成立	
二、第七十七国立銀行盛岡支店郡山出張所	
三、盛岡銀行日詰支店と志和出張所	
四、岩手銀行日詰支店	
五、岩手殖産銀行日詰支店	
六、東北銀行紫波支店	
第二 農業協同組合関連金融機関	七〇四
一、県信連紫波支所	
二、紫波町農業協同組合	
三、志和農業協同組合	
第三 盛岡信用金庫紫波支店	七二〇
第四 無尽	七二二
一、旧制無尽金融	
二、会社無尽金融	
第五 郵便局	七二一
一、郵便貯金	
二、簡易保険	
第五章 文化構造	七二五
第一節 教育	七二五
第一 学校教育	七二五
一、近代教育のあけぼの	
二、近代教育の発展	

三、戦時体制下の教育

四、新しい教育制度の展開

第二 社会教育 八一五

一、明治期から昭和初期の社会教育

二、戦時体制下の社会教育

三、戦後の社会教育

第二節 宗教 九二五

第一 神社神道 九二五

一、制度上の変遷

第二 仏教 九四九

一、寺院の廃合 二、仏堂の整備

三、陸中新四国八十八か所の設定

四、檀家の集団移動 五、仏教会の創立

六、占領政策の反映 七、新興仏教の抬頭

第三 キリスト教 九六三

第四 教派神道 九六七

第六章 交通運輸 九七一

第一節 道路 九七一

第一 藩政期の道路 九七一

第二 明治期の道路 九七三

一、国道筋の延長とその沿革

二、県道筋の推移 三、里道

第三 大正期の道路 九八二

一、国道の変遷 二、県道の変遷

三、里道から町村道へ

第四 昭和期の道路 九八五

一、国道の変遷 二、県道の変遷

三、町村道

第五 道路の乗客用諸車 九九四

一、人力車 二、客馬車 三、自動車

第二節 鉄道 一〇〇六

第一 東北本線 一〇〇六

一、日詰駅 二、古館駅

三、旅客・貨物の推移

第二 東北新幹線 一〇二六

一、東北新幹線工事計画 二、工事の進行

三、東北新幹線開業

第三節 舟運・渡舟場 一〇二九

第一 舟運 一〇二九

第二 渡舟場 一〇三七

第四節 橋梁 一〇四一

第一 平井橋 一〇四一

第二 紫波橋	一〇五三
第三 新「紫波橋」	一〇五五
第四 県道の橋梁	一〇五七
第五 町道の橋梁	一〇五八

第七章 通信・放送

第一節 郵便

第一 紫波郵便局	一〇六六
一、名称及び設置場所の変遷	
二、業務取扱	
三、歴代局長	
第二 上平沢郵便局	一〇六八
一、名称及び主な取扱業務の変遷	
二、歴代局長	
第三 佐比内郵便局	一〇六九
第四 赤沢郵便局	一〇七〇
第五 日詰駅前郵便局	一〇七〇
第六 古館郵便局	一〇七一
第二節 電信・電話	一〇七三
第一 郵便局の業務取扱	一〇七四
一、紫波郵便局	
二、上平沢郵便局	
三、佐比内郵便局	
四、赤沢郵便局	
第二 紫波電報電話局	一〇七八

第三 有線放送

第三節 ラジオ

第四節 テレビ

第五節 電気

第八章 社会問題

第一節 戦争及び事変

第一 西南戦争	一〇一
第二 日清戦争と台湾征伐	一〇四
第三 八甲田山遭難	一〇九
第四 日露戦争	一一一
第五 日独戦争(第一次世界大戦)	一一七
第六 古間木列車衝突事故	一一八
第七 河内艦爆沈事件	一二〇
第八 満州事変	一二一
第九 支那事変	一二四
第十 ノモンハン事件	一二九
第十一 太平洋戦争	一三一
第二節 滝名川の水論	一七八
第一 明治三十三年(一九〇〇)の水論	一七九
第二 大正十三年(一九二四)の水論	一八四

題 字 紫波町長 福田嘉一郎

表紙空押し 紫波町々章

見返し絵図 弘化年代の志和稻荷街道筋

前見返しは志和稻荷神社付近

後見返しは水分神社付近

(南部家所蔵)

△付録▽

大正五年発行の五万分の一地形図(日詰)
昭和五十八年紫波町管内図五万分の一